

# モートンの環境哲学（1）

## Morton's Environmental Philosophy (1)

竹 中 真 也

### 要 旨

本稿は、ティモシー・モートンの環境哲学の一端を解明することを目指す。そうするにあたって、ここでは鍵概念の mesh と strange stranger に焦点を当てる。まずはモートンの哲学を生み出した時代背景「人新世」に触れ、しかるのちに mesh と strange stranger に関する論述を紹介する。最初に豊富な具体的事例を『エコロジーの思想』から取り上げ、次に、『コラプス』に掲載された論文を軸として、それらの事例を哲学的水準から捉え返す。最後に、これらの mesh や strange stranger の議論を、モートンが与されると言われているオブジェクト指向存在論の旗手ハーマンの議論と接続し、モートンの議論の特徴のひとつを浮き彫りにする。

### キーワード

モートン, 人新世, mesh, strange stranger, 否定的差異,  
脱構築, ハーマン, sensual ether, real object

### はじめに

「最近、気候がおかしい」。こう耳にすることが増えている。経験則が通用しないからである。季節外れの台風が到来し、12月でも夏のように暑い日があれば、真冬の寒さになることもある。明らかにおかしい。とはいえ、このことがそれほど奇妙でないこともわかっている。自動車や工場や発電所などから二酸化炭素が大量に排出され、温室効果ガスとなり、結果、気温や海水温の上昇が生じたことを知っているからである。のみならず、日々

排出される大量の日常のごみ、汚水、核廃棄物、土壌や水の汚染に関する不十分な処理、これらも地球の環境に多大な負荷をかけている。地球の環境がもはやこれまでと同じでないことは、なんら目新しい話ではない。

それでは、こうした状況を目の当たりにして、われわれはどのような態度をとるのがよいだろうか。「自然」こそ、われわれ人類の美しき故郷であり、それを取り戻すのが人類存続の唯一の道だ、以前の環境を取り戻すべく、科学技術に基づく文明の利器を捨て、人為の介入していない自然そのものを回復させるべきだ——こう声高に叫ぶべきだろうか。しかし、21世紀において、そもそも、そうした美しき純粋な自然など望むことなどできない。いやそれどころか、じつのところ人類は、みずからの活動によって、地球に対してけっして容易には消すことのできない痕跡を残したのであり、引き返せない状況にある。時代は変わったのであり、新しい時代区分がいまや提唱されている。

こうした時代状況を引き受けつつ、独自の環境哲学を提唱している一人が、ティモシー・モートンである。彼は、生命と非生命の「共存」する真に適切なエコロジーの思想を提示しようとしている。本稿の目的は、モートンの環境哲学における鍵概念の mesh と strange stranger の一端について解明することである。まずは、モートンの環境哲学の背景となっている新たな時代区分、「人新世 (Anthropocene)」を概観し、それから本稿の主題となるモートンの環境哲学への重心を移していこう。

## 第1節 人新世からモートンの環境哲学へ

### 1-1 人新世について

「人新世 (Anthropocene)」<sup>1)</sup> という言葉を最初に用いたのは、エコロジストのユーゲン・F・ステルマー (Eugene F. Stoermer) であるが、この言葉が広まったのは、大気科学者クルツツェンの地球科学の会議 (2000年2月、メ

キシコ）での発言であったと言われている<sup>2)</sup>。のちに、クルツェンはステルマーとの共著論文「人新世」(Crutzen and Stoermer 2000)を發表し、これまでと一線を画する時代の到来を告げた。こうして人新世という概念は、「科学、生物学、生態学といった科学領域だけでなく、社会学、歴史学、文学」(塩田・松永 2017, ix)といった多様な分野において議論されるようになったのである。(とはいえ、我が国においては人文系の学問においてしばしば用いられているように見受けられると思われる。)

それでは、人新世と呼ばれる地質年代が提唱された証拠とはいかなるものか。その証拠として、層序学的証拠〔層序学：地質学のうち、地層のできた順序を研究する分野〕をあげることができる。つまり、自然の生態システムがするよりも、人間の支配の生態システムのほうが、大地の表面を覆っていることが明らかになった (McCloskey and Spalding 1989)。人間は今やこの惑星においてもっとも重要な地質学的な作用者となったのである。それでは、その地層においていかなる人間的な活動が刻まれているのか<sup>3)</sup>。例えば、それは土の量や質に現れる。農業、建設工事、採掘といった人間の活動のほうが、自然の隆起や浸食よりも、いっそう多くの土を動かしており、しかも農業は土の栄養分や質に多大な影響を及ぼし、土壤の貧困化を招いているからである。さらに、プラスチック、コンクリート、1940年代からの核実験によるプルトニウムの同位体「ウラン235」は、ほとんど自然界になかったけれども、それらは地層として残ると言われている。最後に、空気があげられる。産業革命以来、蒸気機関、はたまた化石燃料を燃焼する自動車や工場などの増加によって、大気中の二酸化炭素の濃度が急激に上昇した。この二酸化炭素は雪氷層において気泡となり、堆積物となって見出されるのである。

このような層序学的な証拠としての堆積物が急激に増大したのは1950年前後であると言われている<sup>4)</sup>。人口増加、グローバリゼーション、工場に

おける大量生産、農業の大規模化、大規模ダムの建設、都市の巨大化、テクノロジーの進歩といった社会経済的变化が生じた。こうした人間の活動が急激に加速した現象は、「グレート・アクセラレーション」と呼ばれている。これをきっかけにして、人間の活動の痕跡は、より明白に地質に刻まれることになった。いまやわれわれは、新たな地質年代を生きる人類なのであり、その活動の痕跡を抜きに環境について語ることはできない。それはすぐそばにある。しかも、こうした多様な変化の結果、環境はもはや人間の活動のたんなる背景などではなく、われわれと共存し生活や活動に多大な影響を及ぼす、けっして無視できないアクターとなったのである。

## 1-2 モートンの議論の前提

「人新世」という時代状況を踏まえつつ、モートンは『エコロジーの思想』の序章において以下のように述べている。

われわれが直面しているエコロジーの危機は、あまりにも明白なものであるから、点を結んで全体像を作り上げること、つまりはすべてのものが相互に関連していることを見て取ることは容易になっている——ある人々にとっては、奇妙なほどにまた恐ろしいほどにそうなのである。(ET 1)。

すなわち、われわれが生きている時代は、化石燃料の消費による二酸化炭素の増大、気候変動、異常気象、海面の上昇、動植物の生息地の変化などによって、従来あった生態系が消滅したり破壊されたりした。わざわざエコロジーの危機を煽るまでもなく、目を見開きさえすれば、これらの異常な事態をたやすく見出すことができる。そして、これらのひとつひとつを点として考えるなら、それらを線で結びつけ、ひとつの描像を描くこと

ができる。事実、何かを大量に燃やすという行為は、結果として大量の二酸化炭素を発生させ、地球の温度上昇を招き、気象に変化をもたらす。気象の変化は、地上に留まらず水中にすむ生き物たちの住処にも影響を及ぼし、そのえさとなる昆虫や植物にもその効果が波及する。植物は今度は、土やそこに住む微生物にも影響を与える。こうした相互の連関は、果てしなく続くだろう。

このように、危機の時代にあっては、これまでも増して、ありとあらゆるもののあいだの「相互連関」を至るところに目にすることができる。まさにこうしたすべてのものの「相互連関」から、モートンはエコロジーの哲学を始めるのである。とはいえ、モートンは「相互連関」を徹底的に検討し、独自の立場を打ち出す。彼は、おのれの思想を表現するために、「相互連関」を mesh と呼び、従来の立場とは一線を画そうとする。それでは、mesh とはいかなるものだろうか。そこで、この問題に取り組むにあたって、ここでは『エコロジーの思想』における豊富な具体例に基づいて、まずはその概略をつかむことから始めよう（第2節）。しかるのちに、それを哲学的に原理的にとらえかえす（第3節）。それから、彼が与していると言われるオブジェクト指向存在論の代表者ハーマンの議論と、モートンの議論との関係性を考察する。こうしてモートンの環境哲学の一端を明らかにしよう。

## 第2節 mesh という複雑な網目

あなたは高台にあるマンションの9階の一室に住んでいる。部屋には大きな出窓があり、そこから小さな山が見える。木々が生き茂り、四季折々の景色を楽しませてくれる。夏の夕方頃にその山を散策するなら、土の匂いがして、白や青や黄色の花々が風に揺れているのを目にできる。このマンションに住み始めた頃は、足しげくその山に通い、そうした自然を楽し

み愛でていた。しかし、何度も目にするうち、窓を通して見える山も足元の花も色あせて、たんなる背景へと退いていった。それらは、空気のように、何の変哲もないものになってしまったのである。

われわれは、何であれ、それを繰り返し眺めると、そのものが何であるかを知っているつもりになる。しかも、それがいつまでも変わらずにあると思ひ込み安心してしまう。あくせくした日常生活ではそうせざるをえないのかもしれないし、たんに飽きてしまうのかもしれない。しかしながら、ここであえて、先述の山や花がいかなるものか、それらはいかにして形成されたのかを考えていただきたい。すると、それらは徐々にありふれたものでなくなる。じっさい山は、砂や粘土や岩石や水分や木々や草花からなる。そしてそれらの構成要素は無から急に生成したわけではなく、長大な歴史的な過程を経て、ようやく今の状態に辿り着いた。岩石や砂の一部は古代の恐竜の骨や化石の粉碎された粒子であり、じつはその粒子がわれわれの目に広がっている。のみならず、山には、植物や昆虫や動物など有機体の死骸の分解したものが堆積している。しかるに植物や昆虫や動物がいかなる過程で生まれ成長し死んだのか、またそれらの植物や動物や昆虫を育んだ、他の植物や昆虫や動物たちは、どう生きたのか。それらの呼吸した酸素、飲んだ水がどこからどのようにして生じてきたのか。これらすべてを踏まえた上でなければ、本来、山がいかにして形成されたのかを知ることができないはずである。

さて、もし山がこうした来歴の把握しきれない要素からなるのだとすれば、山という複合的な事物は、その構成要素が多ければ多いぶんだけ、じつのところ、正確な出自を辿りきれない複雑で奇妙な存在者だと言わざるをえない。一輪の花という小さな存在者であっても、土、水、二酸化炭素、酸素、有機物などが必要であり、それらの一粒ずつ、一滴ずつ、 $1\text{ml}$ ずつには膨大な歴史的背景がある。それらが複合されて、ようやく一輪の花が

咲いているのなら、その花の存在はまさにひとつの奇蹟的で謎めいた結果とも言える。出自の知れぬ事物の集合体が一輪の花なのであり、われわれはその正体を突き止めることなどできない。長大な歴史の網目の中に、ものはとらわれているのである。

それだけではない。個体的事物は、歴史だけでなく、まさにいまここにある空間においても相互依存の網目にとらわれている。モートンの言葉を使えば、「いかなる事物もそれ自身では完結していない」（ET33）。モートンは相互依存の例として共生の状態を挙げており、その描写は、共生の網目のもつ多様で複雑なありかたに読者を巻き込む。

木は菌や地衣〔菌類や藻類の一体化した植物群〕を含んでいる。地衣は二つの生命形式が相互作用している——菌とバクテリア、あるいは菌と藻である。種子や花粉は鳥や蜂に循環してもらう。動物や菌の細胞は、ミトコンドリアや、エネルギー細胞（オルガネラ=細胞小器官）を含んでおり、その細胞は、（それらにとって）毒性のあるものとしての酸素のある世界から避難するよう進化したバクテリアである。植物は緑色（自然の色）である。というのもそれらは葉緑体を含んでおり、それはシノアバクテリアに由来するからである。ミトコンドリアと葉緑体はおのれ自身のDNAをもち自分自身を無性生殖で再生産する。われわれの胃は良性のバクテリアや無害なアメーバを含んでいる。シロアリは、セルロースを分解するために、おのれの胃の中で、バクテリアやアメーバに頼っている。シロアリはその廃棄物を食べて生きているのである。これらのミクソトリカは、それ自身で、くらげに似ている小さな（小さな毛を揺らしている）スピロヘータや、スピロヘータが適応する表面上にいる錠剤の形をしたバクテリアからなる「街」である。スポンジは、原生動物のコミュニティーである。〔例えば〕アメー

バは集合して一ミリメートルの長さの「ナメクジ」を形作ることができる。最初の「後生動物」は鞭毛のある原生動物（小さな毛をもつ小さな生物）のコロニーである。植物の大半の根毛は、小さな菌であり、つまりは菌根である。ウイルスのレベルでは、ありとあらゆる種類の自己複製するものたちがいる。……そして究極的には、リチャード・ドーキンスが言うように、「われわれはだれもが、遺伝子の共生するコロニーである」。DNAでさえもが、共生、共進化、寄生、闘争、共同にさらされている。チェシャ猫の笑いのように、われわれは身体なき器官からなる。(ET 33-34)

生物の内部を覗いてみるなら、そこには幾重もの階層が縦横に張り巡らされている。その階層において、それぞれの微生物たちが「社会」や「街」や「コロニー」とも呼べるものを形成し、個々の「社会」や「街」や「コロニー」は、片時も休まず相互に作用し続ける。人間、植物の根の内部、スポンジ、DNAにおいてさえも、「共生、共進化、寄生、闘争、共同」しているのであって、それらの集合体から生命体は成立している。しかも、このようなミクロの方向において、幾重もの階層があるとすれば、同様にしてマクロな方向にも同様な階層を見出すことができる。つまり、「Meshは、無限の結合や無限小の差異からなる。……尺度は、両方の方向において無限であって、両方とはすなわち、大きさにおいて無限であり細部において無限である。そして mesh のうちにあるそれぞれの存在者は、他の存在者と相互に影響しあう。mesh は静態的ではない。われわれはいかなるものも厳密に無関係なものとして特定することができない」(ET 30)。このような mesh から、いかなる帰結が引き出されうるのだろうか。

まず、以上のような mesh からすれば、われわれは、内・外という区別や固定された視点を消失することになる。例えば、モートンは以下のように



に論じている。

……共生は、有機体のあいだだけでなく、有機体の内部においても生じる。交換と相互依存がありとあらゆる水準で生じる。生物の表面は覆いやフィルターであり、複雑な化学的な転移や相互作用が生じる厚い密な境域なのである。生化学はようやく光合成の精密なメカニズムや、養分が胎座を通して胚へと移動することを解明し始めているにすぎない。〔異質な二つの組織の接点ないし接合部分たる〕境界面は、数多くの数え切れない寄生虫や共生者を含んでいた。あるミクロのレベルにおいては、複製している存在者のごたまぜの反乱が生じているのか、その存在者が寄生しているのかを見分けることは難しくなる。〔すなわち〕内側と外側の区別が崩壊するのである。われわれがより多く知れば知るほど、生物はますます必要物をすべて完備したものでなくなる。化学と物理学は、もっとも小さなナノスケールの対象にまで降りていけば、事物がどれほど順応性を持ち、どれほど代替可能であるのかを発見している。(ET 36)

境界面を見出したまさにその面こそ、まさにさまざまな化学的な転移や相互作用のおこなわれる厚い密な境域である。境界と思われたところには明確な境目などなく、もつれた関係が張り巡らされている。そこには寄生虫や共生者のような微生物が溢れ、それらが何をしているのかを厳密に見分けることなどできない。この意味で、境界を境にして単純に内と外に切り離すことなどできない。内部だと思っていたもののうちに外部が見出され、外部だと思われたものがじつは内部なのである。このように、厳密な意味での内部と外部の区別は決定不可能である。

それだけではない。mesh という網目を踏まえれば、個体と環境の境目

も厳密には見出せない。

「拡張された表現型〔遺伝子によって発現された形質の型〕』というドーキンスの仮説によれば、DNAはその個別の媒介者（あなたやわたしのよな）の外の有機体に離れて作用する。DNAの「遺伝型」は、生命のさまざまな表現型において表される。あなたはひとつの表現型であるが、しかし、ある意味で、あなたの家も同様である。ある蜘蛛の巣は表現型である。ビーバーの表現型はその頬髯で終わるのか、それともビーバーのダムで終わるのか。〔草を〕囓んでいる草食動物から得たいくつかの種類の唾液は、植物に甚大な影響を及ぼしている。カタツムリの殻の大きさは、吸虫の遺伝子の機能したものだろう。というのも、その殻は、カタツムリがおのれの吸虫寄生虫と共有している表現型であって、ちょうどそれはビーバーのカップルがダムを共有しているようなことと同様だからである。(ET 34)

ここで完全に外部と思われていた、人間の作り出した家、ビーバーのダムの築いたダム、蜘蛛の作り出した巣などの、一見すると外部にあると思われるものは、遺伝子の表現型によるものであって、内部の一部である。ちょうど身体がDNAの表現であるのと同様にして、家、ダム、巣などもDNAの表現である。とすれば、われわれの外部と思われたものは、けっして絶対的な外部などではなく、外部はじつのところ内部の一部である。たとえ埃といえども、人間の皮膚の一部、くしゃみや咳などからの飛沫、はたまたダニ、カビの孢子、細菌にまみれている。われわれの周囲はさまざまな生物のDNAの痕跡に溢れかえっているのである。

最後に、われわれは「世界」をも失うことになる。すなわち、「世界が、われわれの行為が有意味になるある場所、ある背景」(ET 30)を意味して

いるなら、meshにおいてはすべてのものが潜在的に無際限に有意味であり、まさに背景としての「世界」は消滅するからである。これは、統合失調症患者の状況に似ている。事実、統合失調症の「患者は情報（前景）とノイズ（背景）を区別できない。だから患者は、ラジエーターから声がかかるのを聞くが、それなのに言葉を意味のないぶくぶくいう音として聞く。すべてのものが不気味なほどに有意味に思われるが、しかし患者はその意味が何であるかをはっきりさせることができないのである」（ET 30）。ここでは意味が氾濫しているのであり、多すぎる情報は、何も情報がないも同然である。この場合と同様にして、時間的にも空間的にも mesh の網目からめとれつつ事物が生成し、いまもなおその関係が途切れていないのなら、背景となる「世界」などないことになる。こうして、絶対的な「内と外」の区別、個体と環境の区別、また「世界」が失われた。

ただしこうした議論を展開しているとはいえ、モートンはホーリズムに与しないとも言う。

エコロジカルな思考は、超有機的なものに関わっていない。ホーリズムが主張しているのは、全体は諸部分の総和よりも大きいことである。「自然」はホーリスティックになりやすい。「自然」と違って、エコロジカルな思考が考えていることは、諸部分の総和以上のことではない。……もしわれわれがエコロジーを欲するのであれば、われわれは自然を、より貧弱と思われるようなもので下取りしなければならない。meshは実質のない素材からなるのであって、その構造はきわめて奇妙なものである。われわれがそれを吟味すればするほど、それはますます空虚に思われる。ガイアは退場するのだ。（ET 35）

すなわち、ホーリズムによれば、全体は諸部分の総和ではなく、それに

還元されないものである。例えば、車そのものは、部品が総体に還元されない、それとは異なるものであると考えられるだろう。こうしたホーリズムに対して、モートンのエコロジーの哲学は、ホーリズムをとらない。モートンに言わせれば、自然とは、そこにおける諸事物という部分の総和にほかならず、それ以外にはない。諸部分の総和とは別に、地球にガイアのようなメタの存在者を認めることをモートンは拒否するのであり、ホーリズムではなく「弱い還元主義」(Harman 2012 16-17)を採用する。とはいえ、その構成要素たる個物は、あまりにも多くの際限ない微生物の相互依存の関係からなるのであり、その正体はわれわれにはつかみきれない。個物の捉え難さを表現するために、モートンは個物に「穴」という言葉を用いているのであり、ここから、個物を *strange stranger* と呼ぶのである。ここでの *strange stranger* は、*mesh* の歴史的にも空間的にももつれ合う複雑な様態から、その得体の知れなさが理解される。われわれにはとうてい把握できない膨大な情報を背後に引きずって、個物は存在しているのである。

### 第3節 哲学的水準からの捉え返し

#### 3-1 汎言語主義ないし汎記号主義的な立場

以上のような *mesh* の具体例を支えている哲学的な議論とはいかなるものだろうか。このことを理解するために、'Thinking Ecology; The Mesh, The Strange Stranger, and The Beautiful Soul' (Morton 2010a) という *Collapse* に所収された哲学的な論考を参照しよう。モートンはそのにおいて、生命体や非生命体を含むありとあらゆるもののシステムが、じつは言語のシステムと構造的に一致するという、汎言語主義ないし汎記号主義とでも呼べる立場を展開し、具体例によって展開されていた *mesh* についての論述を、哲学的な水準で論じ直している。

まず、エコロジーの思想にとっての前提としての相互依存は、ふたつの

定理に言い直される。「あるものは他のものから作られる」というのが定理 1 であり、定理 2 は「あるものは他のものに由来する」である。まず、「あるものは他のものから作られる」という第一定理は、モートンによれば、A が not-A から否定的差異によって作られることを意味している。これは相互依存を「共時的な」観点から言い直している。これに対して、「あるものは他のものに由来する」という公理 2 のほうは、A は not-A に由来することであり、「通時的な」観点から示される。ここで通時的、共時的の言葉から察することができるように、この発想はソシュール以後の言語理論を念頭に置いてのことだと考えられる。事実、ソシュールが示したように、言語は否定的な差異に基づく、共時的ないし通時的な記号のシステムにほかならないが、モートンに言わせれば、こうした言語のシステムが生命体のシステムと等しいのである。

それだけではない。こうした差異のシステムからなる言語は、モートンによれば、デリダの脱構築にも従属する<sup>5)</sup>。モートンに言わせれば、ここでの脱構築とは、「構造の構造的性」を考えることであって、その構造は、「果てしなく (open-ended)」、 「中心も端もない (no center and no edge)」ものにほかならない。言語は否定的な差異からなるシステムなので、ある語の意味は、その他の語にほかならず、そのシステムの外はない。ある語の意味にとっての絶対的な基準が言語システムの外部に求められないとすれば、語の意味の追求は、言語のシステムにおいてのみ行われる。とすれば、それは「無際限 (infinite)」に行われることになろう。となると、差異のシステムからなる言語は、内も外もたない無際限のネットワークと行うことができる。こうしたネットワーク構造において、記号の意味を明白にしようとする過程が、モートンに言わせれば、「差延 (différance)」であり、それは「差異 (共時的) の過程と遅延 (通時的) の過程」(Morton 2010a 267) である。ある語の意味は他の語であり、一連の語すなわち文章の意味は、そ

れを読み終わったあとに遡行的にのみ得られるのである。

こうした言語のシステムを前提してから、モートンは以下のような7つのテーゼを提示している (Morton 2010a 268)。

- (1) 「生命体は mesh を構成しており、mesh は無際限であり、それ自体では頭で思考不可能である。」
- (2) 「生命の起源を生命に先立つ瞬間まで辿ることは、パラドックスという結果になるだろう。」
- (3) 「生命と非生命の間を区別することは、厳密には不可能だが、避けることができない。」
- (4) 「ある種と別の種の差異はけっして絶対的ではない。」
- (5) 「生命体のシステムの「外側」はけっしてない。」
- (6) 「相互依存の定理は相互依存のシステムの部分であり、したがって脱構築に従属するのだ。」
- (7) 「システムの結果がどのようなものになるのかを前もって知ることとはできないので、あらゆる生命体は strange strangers として理論化されうる。」

以下においては、それぞれの内容についてのモートンの議論を、補足しつつ概観しよう。

- (1) 「生命体は mesh を構成しており、mesh は無際限であり、それ自体では頭で思考不可能である」。すでにみたように、あらゆる事物は相互連結するのであるが、モートンはそれをここでは「相互依存 (interdependence)」(Morton 2010a 266) と呼ぶ。これがエコロジーの思想の出発点である。これまで、「相互連結」にはさまざまな呼称が与えられてきた。例えば、こ

の言葉はインターネットを連想させるので、「ネットワーク」という呼称を与えられることがある。あるいは、「相互連結」は生氣論 (vitalism) と関わり、そのさいには蜘蛛の巣を連想させるウェブ (web) という言葉が使われることもある。しかしモートンは、これらに対して、「相互連結」に独自の意味をこめて、あえて mesh と名付ける。というのも mesh は、ネットワークの穴も、それらの穴の間の網目も意味するという意味で、モートンの意に沿うものであったからである。個々の事物は、おのれのもつ情報を他の事物にたいして、完全に伝達できないという意味で、そこには穴がある。ちょうど、音楽の MP3 や JPEG のように、mesh には目ではとらえられないほど精巧で微細な穴が開いている (Cf. Morton 2013b 83)。それと同じようにして、現象している色や形や音などは、もの同士において浮かび上がるひとつの不完全な現われである。

言葉の辞書的な意味からも、モートンは語の選択の適切さを示そうとしている。じっさい、mesh には仮面 (mask) や塊 (mass) という古い意味があり、それらは濃密さ (density) や欺瞞 (deception) を示唆している (*Oxford English Dictionary*, 'mesh', n.1.a-c.)。しかも、そうした意味をもとにして、「人が巻き込まれる複雑な状況や一連の出来事、束縛したり制限したりする一連の力や状況、わな」 (*Oxford English Dictionary*, 'mesh', n.2.) という意味も生じた。これらの意味は mesh のありかたに一致する。すなわち、mesh は幾重も張り巡らされた網目であるという意味で濃さをもつものの、それは個物の正体そのものを開示してはいない。mesh は、個物が単独で存立することはなく、さまざまな他の個物との複雑な関連のもとにおかれており、それがゆえに個々の物はそれに巻き込まれ、束縛され、制限されている。まるで罫にかかったかのような状態にあるのが個物なのである。

さて、こうした mesh は、個物の相互の連関からなるのであるが、そ

これらの「相互連関」はあまりにも広大でもあり微小なところにも及ぶので、「meshにおけるそれぞれの交点は、交点の体系の中心でも端でもあるので、絶対的な中心も端もない」(Morton 2010a 270)。だからこそ、こうしたものを全体として頭で思考することはできないのであり、meshはあまりにも情報が多すぎる無際限の網目である。そしてこうした網目は、生命と非生命の両方にまたがっている。ここから次のようなテーゼが出てくる。

- (2) 「生命の起源を生命に先立つ瞬間まで辿ることは、パラドックスという結果になるだろう。」モートンの挙げているところによれば、ソル・シュピーゲルマンのRNAに関する発見によって、「生命」と「非生命」の厳密な意味での区別が不可能であることが明らかになった。生命体が始まるためには、奇妙でパラドキシカルな言い方で、「生以前の生命 (pre-living life)」(Morton 2010a 270)〔生きる前に生きている状態〕が必要なのであり、それはRNAや、ケイ酸塩のような自己複製する結晶からなる。しかるに、原始地球にあったRNAの自己複製系から生命が生じてきたとするRNAワールド仮説が正しいとすれば、RNAワールドが解き明かしたのは、RNAワールドが言語のように構築されており、それが「一連の空虚な形式的関係 (a set of empty formal relationships)」(Morton 2010a 270) からなることである。そうだとすれば、生命といえども物質の形式的な関係性から生命体が成り立つのなら、生命と非生命の区別はそもそもできないことになる。生命の内部においてすでに生命でないものが避けられない仕方で侵入しているのである。しかしそうだとすると、以下のようなテーゼが出てくる。

- (3) 「生命と非生命の間を区別することは厳密には不可能だが、けれども



〔そのことは〕避けることができない」。われわれが生命と非生命について深く考えるようになると、自然物と人工物の区別をする必要はなくなる。じっさい、例えば、ウイロイド＝低分子量の一本鎖RNAからなる植物病原体は、ウイルスよりも10倍小さい存在者であり、RNAコードの円環からなる。その起源はきわめて古く、おそらくはRNAワールドにその起源があると考えられている。この小さな円のコードは食べたり新陳代謝したりしない。そうではなく、それらは、自分が見出した他のDNAのシステムを介して、自分自身を複製するのである。もしこうしたウイロイドが生きていると考えるなら、コンピューターウイルスも生きていたことになる。コンピューターウイルスもまさに一連のコードであり、自分自身の複製を作るよう他のコードに働きかけるからである<sup>6)</sup>。そうだとすれば、コンピューターウイルスとウイロイドの区別ができなくなる。それでは、生物の種の区別についてはどのように考えるべきだろうか。

(4) 「ある種と別の種の差異化は、けっして絶対的ではない」。生物の種は、生命体に対して「遡及的に (retroactively)」(Morton 2010a 271) 適用されたラベルであり、絶対的に固定された生物の種そのものもなければ、進化の歴史においてはいかなる固定点もないのであり、いまもまさに生物は変化しつつあるのであって、差延の原理がここでは適用されることになる。それでは、生命の外部についてはどう考えるのか。

(5) 「生命体のシステムの「外側」はけっしてない」。言語のシステムにおいて、内部と思われたものにおいてはすでに外部が伏在している。パロールはすでにあらかじめエクリチュールに汚染されている。このことと同様に、生命のシステムという内的なものはずでに非生命という外的な

ものを含んでおり、この不可避の構造は果てしなく続く。それだけではない。外的なものと思われる環境についても、それは純粹に外的なものとは言えない。モートンに言わせれば、環境それ自体と呼ぶことができるようなものはない。じっさい、われわれの DNA は、その指のところでその表現を止めるわけではなく、話しているときに出す音声、われわれの作り出す家なども DNA の表現型の現われなのであり、それも純粹に外的なものと呼べない。すでに見たように、ビーバーの DNA は、その頬髯のところで止まるわけではなく、そのダムのところにも及んでいるし、蜘蛛の DNA は蜘蛛の巣にも表現されている。とすると、環境とは、生命科学の観点からすれば、DNA コードの表現型の顕在化したものと言うことができる。酸素であっても、それは嫌気性の細菌の排泄物なのであるし、鉄鉱石は、古代の新陳代謝の過程の産物なのである。

しかし、「相互連関」そのものは自然環境の外部になるのではないか、それはメタ的な言説ないし内容だと思われるかもしれない。しかし、そうではない。

(6)「相互依存の定理は、相互依存のシステムの部分であり、したがって脱構築に従属するのだ。」モートンに言わせれば、相互依存の定理には、すでに論じたように、ふたつのものがあつた。「あるものは他のものからなる」と「あるものは他のものに由来する」である。これらの定理もまた言語のシステムの一部に含まれているのであり、メタ的で特権的な地位にあるわけではない。これらも脱構築されることになる。このことは、生命体のシステムにおいても同様である。そこには特権的な地位のものはない。

たとえば、人間の身体は、腕や脚や頭や脳などからなるし、鳥、サメなども同様にして器官からなる。しかるに、これらの器官は細胞からな

るのであり、植物、菌、アメーバ、バクテリアも同様である。しかも、これらの細胞は、細胞小器官を含んでいる。これらの細胞小器官は、例えばミトコンドリアや葉緑体などのような変容したバクテリアである。それらはDNAを含んでおり、バクテリアのDNAとウイルスの挿入の混成された融合体である。DNAのレベルでは、どの配列が「真正の」ものであるかとか、どれがウイルスの挿入されたものであるのかを決定するのは不可能である。バクテリアの中には、ウイルスのコードのようなプラスミド〔染色体とは独立に増殖できる遺伝因子〕がある。プラスミドは、バクテリアという主人のうちにいるある種の寄生者であるが、DNAのレベルにおいては、いずれが主人で寄生者かについて容易に断言することができない。以上の事例からわかるように、構成要素は、その帰属するシステム全体をもたないような構成要素となるのであり、そうした構成要素は、ジジェク言葉を借りれば、「身体なき器官」と呼ぶことができる。すなわち、身体という特権的で統一的なものなどないのである。以上のようなシステムからすれば、次のようなことが引き出される。

- (7) 「システムの結果がどのようなものになるのかを前もって知ることはできないので、あらゆる生命体は *strange strangers* として理論化される。」

これまでの *mesh* のありかたを顧みれば、個物の構成要素の来歴すべてを把握することなど不可能であるので、個物は次の瞬間にどのようなのかを予測することが全くできない。モートンはそうしたありかたの個物を *strange stranger* と呼び、それはデリダの *arrivant* と類似したものだと言う。モートンによれば、*arrivant* は、われわれがその到来をまったく予期できないし予告することができないような存在者である。『自然なきエコロジー』においても、デリダからの引用に基づいて「到来者」

について言及している。すなわち「予期されることも招かれることもない者、絶対的に異邦的である訪問者として到来し、同定されることもなければ予見されることもなく完全に他なる者である新しい到来者として到来する者」(Morton 2007 100, 邦訳193)が *arrivant* である。この説明は *strange stranger* にも適用されるのである。

またモートンによれば、*strange stranger* は、フロイト的な意味で「不気味な」存在者でもある。ある馴染みあるものが抑圧され疎遠になり、本来は「秘密で隠されてあるべきはずだったものが現れ出たとき」、それは「不気味なもの」になる (Cf. Freud 1919, 12, 235)。フロイトの「不気味なもの」をモートンの議論に適用してみるなら、われわれの目の前に慣れ親しんだ個物——例えばパンや皿や机など——があるものの、それが背景に退いたのち、それがふたたび個物として表に現れ出るとき、それは「不気味なもの」になる。このとき、個物は *strange stranger* になるのである。

これまでの7つのテーゼを簡単にまとめておこう。モートンによれば、言語のシステムは、生命体のシステムと同じものである。生命体は *mesh* からなるが、その連鎖はまさに無際限であり、そうであるがゆえに、われわれにはそのすべてを思考することなどできない。しかも、生命の起源を生命に先立つ瞬間まで辿ると、生命と非生命の間を区別することは、厳密には不可能である。また、生物の種の分類は「遡行的に」行われるのであって、いまなお変化の途上にある生物からすれば、それをある種に完全に限定することなどできない。そして、そうした生命体のシステムは、生命体の内部のうちに外部を含み、外部と思われたものもじつは内部のものである。事実、生命体の外部にあると思われていたものはDNAの表現の一部なのである。こうした内外の区別が果てしなくずれるシステムにおい

ては、特権的なメタの地位のものなどはない。したがって、生命／非生命、ある種／別の種、内／外が絶対的に区別されえない、無際限に連鎖するシステムが mesh なのであって、この mesh から知られるのが個物である。とすれば、個々の事物が結果的に何になるかを前もって知ることなどできないことになる。この意味において、あらゆる生命体やものは、期待も予想もできない、得体の知れない不気味な個体こそ strange strangers なのである。

### 3-2 モートンとハーマンの関係

このように見てくれば、モートンは mesh の議論ののちに、strange strangers を論じているようにも解釈できる。mesh の網目は、あまりにも広大で複雑で、厳密な境界線の引けない無際限のシステムであり、そうであるがゆえに人間は、その全体を思考することができないのであった。このような来歴や構成要素の汲みつくせなさから、個体が次の瞬間にどのようなになるのが予測不可能となり、個体は strange stranger と呼ばれたのである。それでは、こうした議論は、モートンが与しようとしているハーマンと同じものだと言うことができるだろうか。じつは、モートンがハーマンの議論と自分の議論を接続させようとしている文章がある。彼は『リアリスト・マジック』において以下のように言及している。

われわれが現実に見ているものは、堅固に見えているように思われるにすぎない繊細な mesh である。オブジェクトの前にあるのが mesh である。すべての事物の相互の連関は精妙に編まれた組織なのであり、そうした組織が、わたしが他のところで strange strangers と呼んだものの前に漂っている。すなわち、ありとあらゆる存在者、つまりは発泡スチロールや電波からピーナッツや小惑星に至るまでの存在者は、

還元できないほどに不気味なのである。ハーマンの言葉で言えば、この mesh は感覚的エーテル [色や音や匂いのような感覚的な質のようなもの] であり、real object が strange strangers である。(RM 75)

モートンはここで、mesh と strange stranger を、sensual ether と real object と並行して論じている。すなわち、ここでは、mesh が strange stranger つまりは個体の前に漂うと表現されており、これが、ハーマンの言う sensual ether に等しい。ここでの sensual ether という表現は、ハーマンにおいてほとんど見かけない表現であると思われるが、sensual ether を sensual quality として解釈してよいなら——じっさいハーマンは ether を quality と互換的に用いている<sup>7)</sup>——sensual ether は赤色、匂い、味などの感覚的な現われである。とすれば、もののあいだに漂う感覚的な現われの無際限の連鎖のようなものが mesh であるとモートンは言いたいことになる。そして、上述のように、mesh の網目はあまりに広大で複雑で、厳密な境界線の引けない無際限のシステムであった。strange stranger はそうした無際限のシステムにおいてこそ、その strangeness が際立つのである。この strange stranger がハーマンのいう実在的オブジェクトに対応すると、モートンは言う。しかし、strange stranger はハーマンにおける real object と果たして一致するのだろうか。すなわち、ハーマンによれば、real object は「自立している (autonomous)」のであり、他のものから構成されるわけではなく、それ自体で存在する。real object は、いかなるものとも関係していないがゆえに端的にそれ自体として「汲みつくせない」し「深み (depth)」をもつ。他方で、モートンの場合、上述のように、個物があまにも多くの文脈を背負うがゆえに、それが次の瞬間にどのように変容するかが分からないという意味で、デリダの到来者やフロイトの「不気味なもの」と等しいと言われていた。とすれば、ハーマンの real object とモートンの strange

stranger は、たしかに、ともに得体が知れないものであるし、その性質を「汲みつくせない」ものであるが、しかしその内実が異なるのではないか。こうした懸念が生じてくる。

しかし、もしモートンの mesh と strange stranger のつながりが上記の通りだとしても、モートンとハーマンの議論を調和させる解釈がありうるかもしれない。すなわち、たしかに mesh は認識において先立つので、そこから個物がいかなるものかへとわれわれは移行する。しかし、存在から言えば、mesh の以前にすでにあらかじめ個物がある。個物があるからこそ、そうした mesh が発生するからである。このとき、個物はすでにあらかじめ得体の知れない、よそよそしいものであり、そのことは mesh を通じてわれわれに知られるのである、と。このように理解することができるのであれば、のちに strange stranger と分かるさまざまな個物があらかじめあり、それらが関係するときに mesh が生じてくる。こう理解すれば、ハーマンの議論とモートンのそれは近づく。じっさいモートンは、個物が破壊されたときによりやく、strange stranger が現れると論じることがある。例えば、スーパーマーケットの建物は、食品の鮮度を適切に保ち、顧客にそこにある製品を多く売ることを目的としている。つまりスーパーマーケットの建物は目的連関ないし道具連関のうちにある。しかしその店が潰れ廃墟となったとき、その店は本来の姿、strange stranger になる。これは、ちょうどハンマーが壊れてしまい、道具連関の網目から解放されたときにこそ、それが実在的オブジェクトたることを示すと述べるハーマンの議論と軌を一にする。こうして考えてみれば、モートンの議論は重なるようにも思われるが、モートンが、個物を strange stranger と呼ぶ所以が、これで明らかになるわけではないだろう。ともあれ、少なくともモートンにおける strange stranger がいかなるものかについては、ハーマン論とも呼べる『リアリスト・マジック』や『ハイパーオブジェクト』の議論を丁寧に読み解

く必要があるだろう。

### むすびとして

これまでモートンの『エコロジーの思想』や論考に基づいて、とりわけ mesh や strange stranger を検討してきた。第1節においては、モートンの環境哲学の前提となる時代背景として「人新世」について言及した。ここでは人間の活動が地球環境にたいして地質学的に痕跡を残すことが明らかにされた。第2節においては、『エコロジーの思想』に基づいて、モートンの環境哲学における鍵概念の mesh と strange stranger を、具体例を通じて提示した。第3節においては、モートンによる具体的議論を、哲学的水準から論じ直した。そこでは現代の記号論ないし言語論が、生命体のみならず非生命体にも適用された。言語ないし記号のシステムは、否定的差異のシステムであり、脱構築に従属する。モートンはこれを生命体や非生命体にも適用するのである。ここにおいてわれわれは、汎言語主義ないし汎記号主義とも呼べるモートンの環境哲学の一端を垣間見た。そののち、われわれは、mesh と strange stranger に関する議論が、ハーマンにおける sensual ether と real object に対応しない解釈の可能性を見出した。もしそうだとすれば、モートンの議論はハーマンのそれとどのように関連するのか。そもそも mesh や strange stranger はモートンの環境哲学におけるもうひとつの鍵概念の Hyper object といかなる関係にあるのだろうか。換言すれば、彼の環境哲学の著作『エコロジーの思想』の議論と『リアリスト・マジック』以降の議論とがいかんしてつながるのか。これらのことが彼の著作に基づいて次に問われるべきことである。



注

- 1) 人新世についての本節の概略については、日本語の文献でも増えてきており、参照した（奥野 2017, 篠原 2018, 塩田・松本 2017）。
- 2) この経緯については、Zalasiewicz 2016に書かれている。
- 3) この段落の以下の議論については、吉川浩満氏による以下のサイトを参照した。<http://10plus1.jp/monthly/2017/01/issue-09.php>
- 4) とはいえ、人新世のはじまりをどの時点に置くかには学者によって異なる（塩田・松永 2017, ix-x）。
- 5) モートンによるデリダについての議論が、デリダ自身の議論に忠実であるかどうかは疑問の余地があるようにも思われるが、この点については別の機会に検討したい。
- 6) このコンピューターウイルスについては、Morton 2011を参照した。モートンはこの論文において、ここでの七つのテーゼを再掲しており、そこでは *Collapse* にはなかった説明を付け加えている。
- 7) ハーマンは『ゲリラ形而上学』において ether を quality と互換的に用いている（Harman 2005 33-44）。

文 献 表

- Crutzen, P. J. and Stoermer, E. F. 2000, "The "Anthropocene"", in *Global Change Newsletter*, 41, 17-18.
- Freud, G. 1919. "Das unheimliche", in *Gesammelte Werke* 18Bde. Hrsg. v. Anna Freud usw. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt a. M, 1999. (引用は巻数とページ数を記す)。
- Harman, G. 2005. *Guerrilla Metaphysics* Open Court.
- 2012. "The Mesh, the Strange Stranger, and Hyperobjects: Morton's Ecological Ontology" in *Tarp* 2 (1):16-19.
- McCloskey, J. M. and Spalding, H. 1989. "A Reconnaissance Level Inventory of the Amount of Wilderness Remaining in the World", in *Ambio* Vol.18, No. 4 (1989), pp. 221-227.
- Morton, T. 2007. *Ecology Without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics*, Harvard University Press. (邦訳：ティモシー・モートン（篠原雅武訳）『自然なきエコロジー』，以文社，2018年）。
- 2010a. "Thinking Ecology: The Mesh, The Strange Stranger, and the Beautiful Soul", in *Collapse* VI, Urbanomic.

- 2010b. *The Ecological Thought*, Harvard University Press. (略記号 ET)
- 2011. “The Mesh”, in *Environmental Criticism for the Twenty-First Century*, ed. and introduced by Stephanie LeMenager, Teresa Shewry, and Ken Hiltner, Routledge.
- 2013a. *Realist Magic: Objects, Ontology, Causality*, Open Humanities Press. (略記号 RM)
- 2013b. *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World*, University of Minnesota Press.
- Zalasiewicz, J. 2016. “A History in Layers” in *Scientific American*, 315, pp. 30-37. (邦訳: 『日経サイエンス』 2016年12月号, 日経サイエンス社, 63-70頁)
- 奥野克己, 2017, 「明るい人新世, 暗い人新世」, 『現代思想 特集人新世』所収, 青土社。
- 塩田弘, 松永京子ほか編著, 2017, 『エコクリティシズムの波を超えて——人新世の地球を生きる——』音羽書房鶴見書店。
- 篠原雅武, 2018, 『人新世の哲学: 思弁的實在論以後の「人間の条件」』, 人文書院。